【国　語　科】

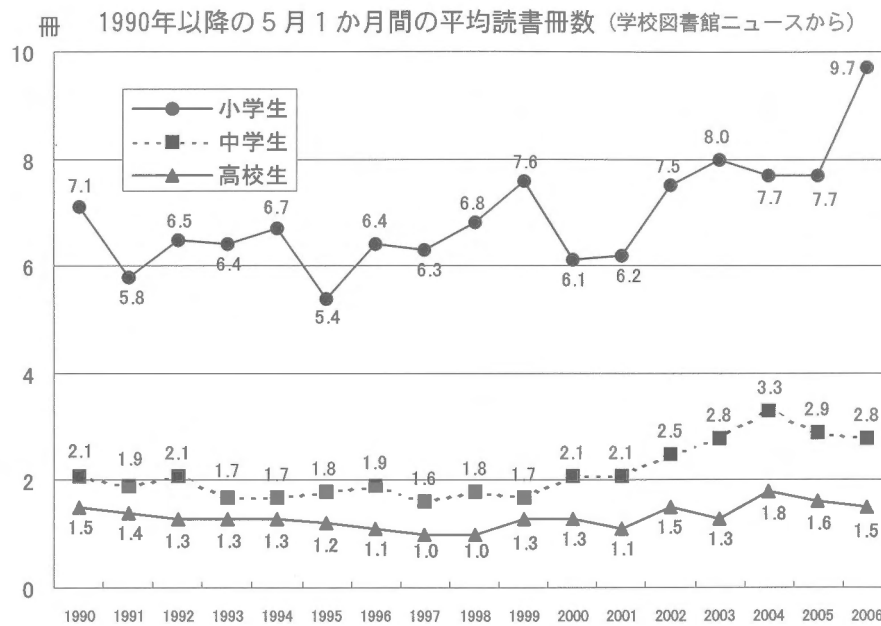
読書を広げる小単元の試み

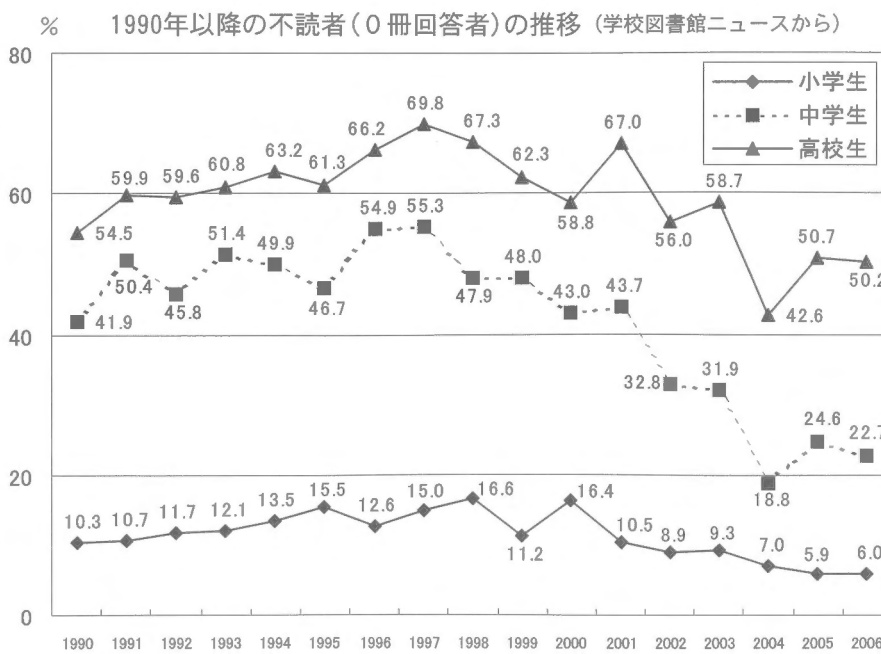
湯　浅　哲　司

はじめに

朝読書の全国的な広がりとともに，順調に伸びてきた平均読書冊数と順調に減ってきた不読率がここにきて頭打ちで横ばいである。中学校，高等学校では後退傾向もうかがわれる。「子ども読書アンケート調査」によると，平成16年を最高に17，18年と中学校，高等学校においては平均冊数の減少や不読率の増加が見られる。

こうした結果の理由についても調査されている。中，高校生が時間のなさを理由に挙げている。しかし，こうした理由は近年の新たな傾向ではない。そこで，近年の教育状況からこうした結果に至った理由を考えてみると，いくつかを想像できる。一つは，いわゆる朝読書の増加の頭打ちがあるのかもしれないということ。あるいは，学力をつけるという観点から読解中心の傾向が復活し，読書離れを招く要因になっているのかもしれないということ。これら以外にもいくつかの理由が考えられるのだが，こうした結果の理由の一つとして，「読書を広げる」[※3]という指導が充分でない点が，一つの要因であると筆者は考えている。小学校においては自分の興味のむくままに読み進めていくことで，多読となり不読率も減る。しかし，中，高校生においてはますます読書にあてる時間が制約されていく中で本当に読





書を自分のものにしている生徒がどれだけいるのだろうか。自己の生活と密着し，自己の人生と関与できるような読書を見つけさせていきたいものである。

こうした観点から，本研究では生徒の読書を広げていく小単元の展開を試みた。

Ⅰ　研究の視点

1　読書指導

①　生徒の読書

本校においても，平成18年度から「朝読書」を行っており，大部分の生徒にとって，読書は生活の一部としての定着が見られる。毎日，自分の読みたい本を手元において寸暇を惜しんで読む者，読んだ本の感想を生徒同士で交換する者，教師に感想を聞かせたり，本についての意見を求めたりするなどの姿も見られる。

一方，朝学習（任意の学習，読書でもよい）を行っている三年生においては，個々の生徒による読書への取り組みの違いが際だってくるように感じられる。

②　読書単元

本校国語科においては，全学年を通して年時から帯単元と教科書教材を中心とした主単元とで構成している。帯単元については，できるだけ主単元にかかわって，所謂「耕し」（学習への準備）や反復や確認などに充ててきた。帯単元で扱う領域としては，「話す・聞く」，「書くこと」，「読むこと」，「言語事項」などについて，あまり偏りのないものとするように考えて学習をすすめてきている。

その一つとして，読書を中心とする帯単元があるが，これについては，自分が気に入った本を使ってそれを紹介するなどの活動を行ってきている。こうした活動の目標の一つとしては，生活の中に読書を定着させていくこと，広げていくことなどを考えている。

2　研究の目的

本研究においては，前項で述べたとおり，「生活の中に読書を定着させていくこと，広げていくこと」を目標とする小単元の試みである。生徒の読書を真に生徒の生活の中のものとするために，たくさんのジャンルのものにふれたり，友達の感想や意見を聞いたりさせるなどして，今まで無自覚だった読書の世界に気づかせていく単元の展開を試みるものである。

Ⅱ　第二学年における小単元の実践

1　単元名　「２－１の39冊を作ろう～読書紹介」

2　目　標

・自分の読書をふりかえるとともに，友達の紹介を読んで，いっそう読書を広げていく態度を養う。
・読書紹介を編集する視点について友達と話し合うことができる。
・友達が興味をもつよう考えながら，わかりやすく紹介を書き上げることができる。

3　単元について

本単元は，　30分×７回　（約４時間分）で計画している。

見通しをもつ　→　書く　→　編む　→　作る　→　まとめ

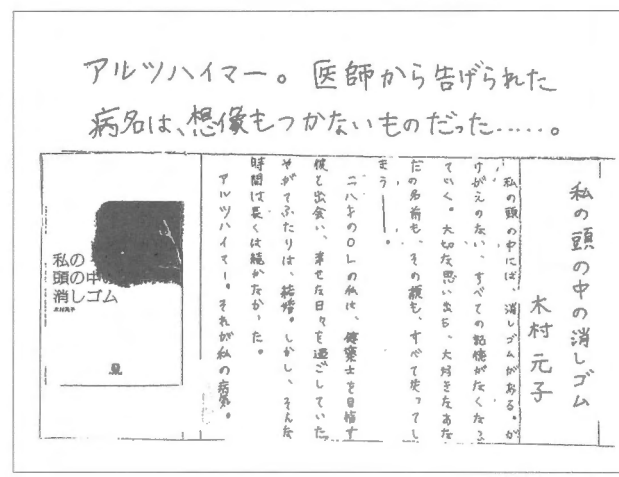
一人一人の読書をもとにして活動を行い，今後の読書につなげていく活動であり，「話す・聞く」，「書く」，「読む」などの様々な目標を入れたものである。こうした活動は，中学１年生のときにも行っており，３年生においても行っていく予定である。

今回は，全員の紹介を冊子にしていくこと，編集していくことなどを盛り込んだ活動にすることによって，読書の広がりを促すことを考えた。特に友達と話し合って編集する活動については，編集するという立場から他の生徒の紹介を見ていくことによって，多くのこと（ジャンル，内容，テーマなど）に気づき，より深く他の生徒の紹介した作品を知ろうとするのではないかと考えた。また，そうしたときに話し合いながら編集を進めていくことによって，いっそう深く作品とふれあうことができ，新しい読書の世界をひらく手がかりとなっていくよう願うものでもある。

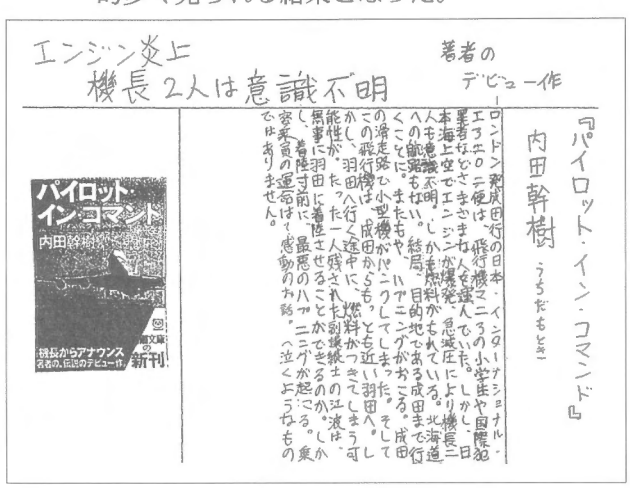
4　導入から紹介文の作成へ

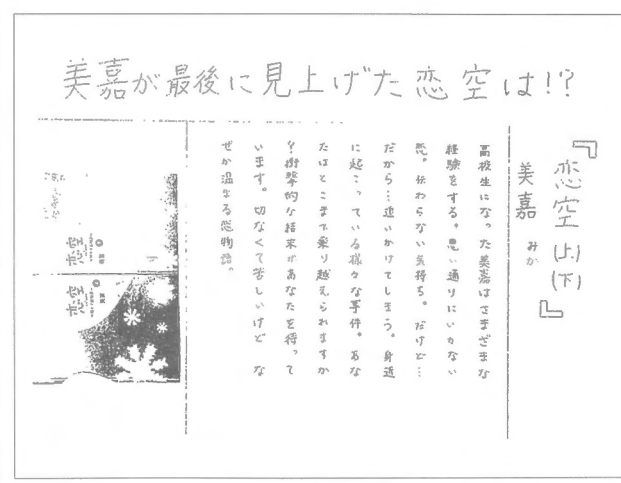
本単元の導入については，見通しをもてるようまず「２－１の39冊を作ろう」と題して，教師が書いた本の紹介を配布するとともに，最終的にめざしていく形として「新潮文庫の100冊」を提示した。こうして，紹介文をつくっていった。本の選定に関しては，細かな注意などは行わなかったが，「同級生のみんなに紹介したい本」を選ぶこととした。また，全体で一つの冊子になるという点についても強調しつつ紹介文を書かせることとした。

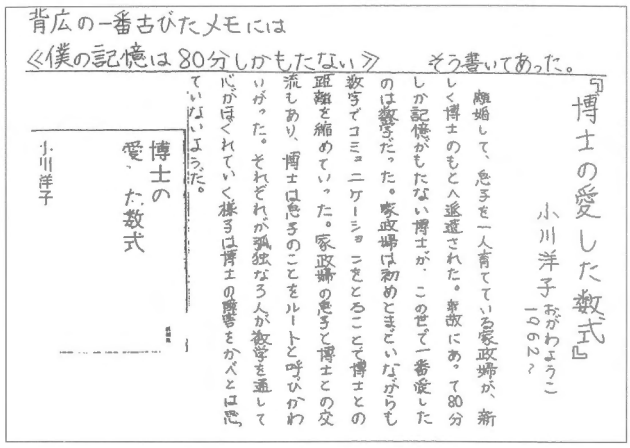
紹介の内容については，「友達が読みたくなるような」ということが第一目標であるが，これについてはモデルにした「新潮文庫の100冊」の書き方が大いに参考になったと思われる。リードの付け方，粗筋の要約，謎をかき立てるような説明などバラエティーに富んだモデルであった。



そうした中で書かれた紹介もバラエティーに富んだものとなった。多くは文学，特に小説ではあったが，中には評論的なものなども各クラスに含まれていた。当初，映画やテレビの原作になっているものなど，いわゆるベストセラー的な作品が多いことを予想していたが，今回はそうしたものよりもそれぞれが特に生活の中で，生きていく上で示唆を受けた作品（生徒へのききとりから）なども比較的多く見られる結果となった。





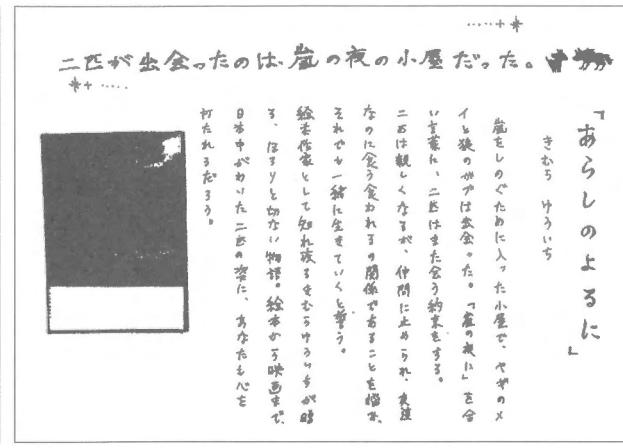

背広の一番古びたメモには
《僕の記憶は80分しかもたない》　そう書いてあった。

『博士の愛した数式』
小川洋子　おがわようこ
1962～

離婚して、息子を一人育てている家政婦が、新しく博士のもとへ派遣された。事故にあって80分しか記憶がもたない博士が、この世で一番愛したのは数学だった。家政婦は初めとまどいながらも数学でコミュニケーションをとることで博士との距離を縮めていった。家政婦の息子と博士との交流もあり、博士は息子のことをルートと呼びかわいがった。それぞれが孤独な人が数学を通して心がほぐれていく様子は博士の障害をかべとは思っていないようだった。

博士の愛した数式

小川洋子


二匹が出会ったのは、嵐の夜の小屋だった。

「あらしのよるに」
きむら　ゆういち

嵐をしのぐために入った小屋で、ヤギのメイと狼のガブは出会った。「嵐の夜に」と合い言葉に、二匹はまた会う約束をする。二匹は親しくなるが、仲間に止められ、食べられる関係であることを悩む。なのに食う食われる関係であることを悩む。それでも一緒に生きていくと誓う。絵本作家として知れ渡るきむらゆういちが時を、ほろりとさせる物語。絵本から映画まで、日本中がわかった二匹の姿に、あなたも心を打たれるだろう。

5　話し合って編集する

編集については，まず教師が選んだ８作品について上下段組見開き４頁の小冊子を二人で相談しながら行っていくという形式をとった。下記のものが，この時間の展開である。

学習事項	生徒の活動と意識	教師の支援（○）と留意点（・）
○本時の見通しをもつ ・編集の視点を考える。	○友達と話し合いながら編集する。 編集の視点 ・作品，作家の五十音順 ・ジャンル別 文学，非文学など ・感動できる本など ・元気が出る本など ○編集の仕方について発表する。	・今回は８つの紹介について，編集を行ってみる。 ・隣の友達と話し合いながら編集を行わせる。 ・話し合いの視点 どういう視点で編集したら読む人にとって，よりよい読書紹介の冊子ができるだろうか。 ○なかなか意見を出すことができないグループには，いくつかの視点を提示するなどの支援を行う。 ・その利点を説明させ，次回に編集する際の参考にさせる。 ・年代等について補足を加えていく。

ここで見られた編集の視点は下記のものであった。

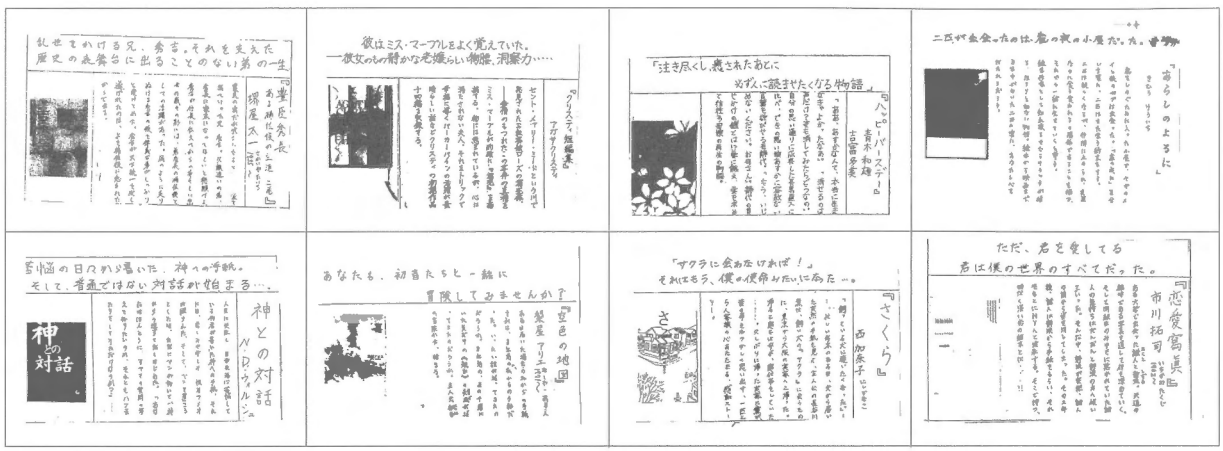
①　作品名の五十音順に並べる。
②　読み手の興味の順に並べる。
　・とっつきやすそうなものから
　・映像化されているものから
　・評論を最後に
③　ジャンル別に並べる。
　・小説から評論へ
　・見開きでグループに分ける。
④　作家名の五十音順に並べる。
⑤　その他
　・表紙のイメージでわける。
　・リードの言葉で分ける。

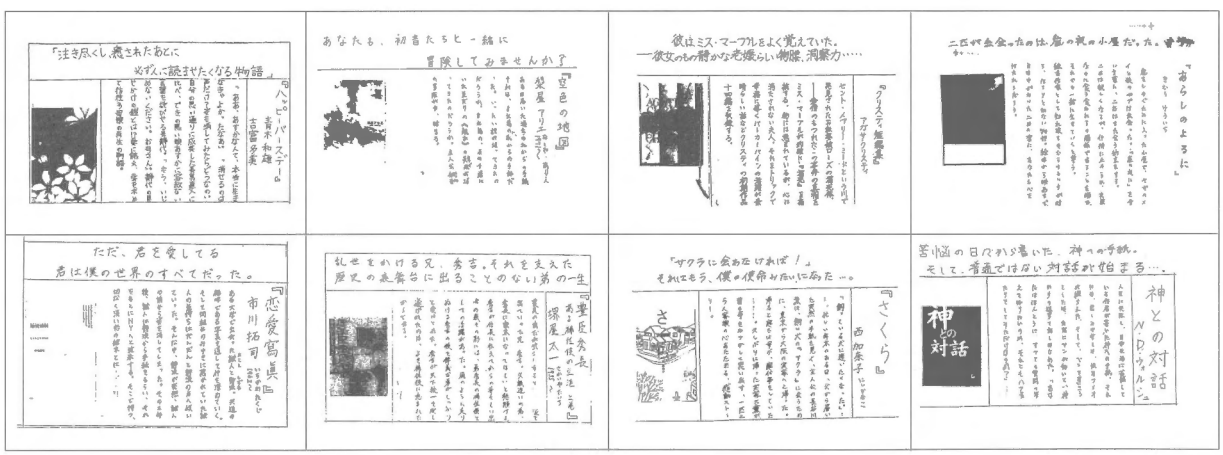
こうして，編集を行ってみると編集者の意識の中に読み手の立場がどのように反映されているのか，ということが明らかになったように思う。「③　読み手の興味の順」や「③　ジャンル別」

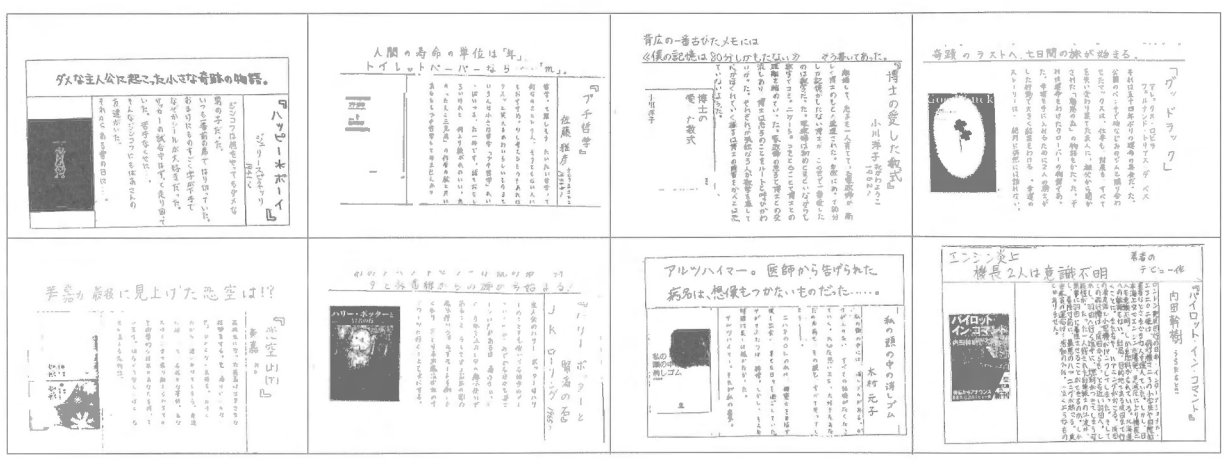
については，読み手を意識した編集になっていたのだが，「① 作品名の五十音順」や「作家名の五十音順」に配列したものについては，編集者の使いやすさというものが，反映される結果になっていたように思う。こうしたことについては，編集の視点について発表する際にその意図が明らかになるように教師から問いを投げかけた。

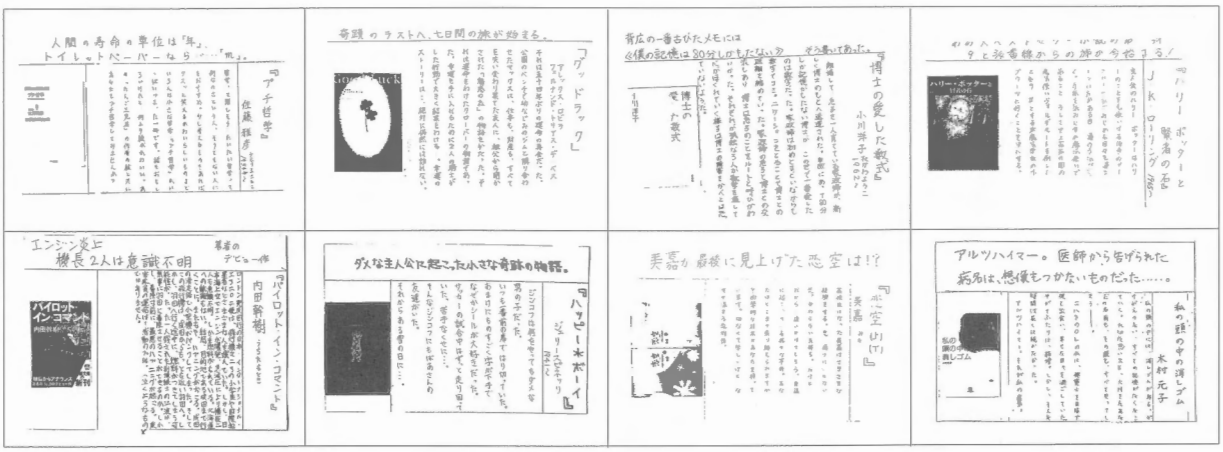
また，「表紙のイメージ」や「リードの言葉」について分けているものについては，これも読み手の意識に沿った配列の仕方であるよう感じられた。

こうしたことをふまえた上で，「友達が読みたくなるような」という視点での編集の話し合いを重ねた。その結果，冊子の中に配列がわかる表示，目次などを追加していくグループも見られた。









Ⅳ　今後の展望と課題

今回の小単元の学習においてねらったのは，生徒に「自己の生活と密着し，自己の人生と関与できるような読書を見つけさせたい」という目的であった。こうした，目標への評価は単元が終わったからといって即断できるものではなく，今後の読書生活の推移を評価していくことによって初めて明らかになるものである。

今回の学習は，「読書を広げる」という観点から見れば，読書前の指導に位置づけられる。これと同様に読書の中・後の指導も行っていかなければならないと考える。読書中における「味わう指導」，読書後における「意見を交換する指導」を含む単元も組織していきたい。

適切な読書指導を続けていくことで，一人でも多くの生徒が真の読書生活者となるよう実践を続けていきたい。

（ゆあさ　てつじ　国語科　yuasa@edu.shimane-u.ac.jp）

（注）

※1　朝の読書推進協議会による

※2　「第50回読書調査」全国学校図書館協議会による

※3　桑原隆は新潮文庫『けっぱり先生』の小野田勇の解説を引用し次のように述べている。「個性的嗜好，すなわち「私の好きな作家」「私の好きな作品」「私の好きな文章」「私の好きな詩・短歌・俳句」といった世界を発掘し，それを伸長していくことが，読書生活を豊かにし，ひいては読書力，読解力をも高めていく」（『言語生活者を育てる－言語生活論＆ホール・ランゲージの地平』1996東洋館）

また，安居總子は「読書生活者」を次のように定義している。「読書が生活に位置づけられている人」「読むという行為が，文字情報とかかわって知識情報を獲得し，それと並行して思考したり，想像したり，新たなものを創り出したり，といった統合的行為として身についている人」「読書をいかし，読書生活を充実させるという生活の喜び・楽しみを知っている人」（『読書生活者を育てる』2005東洋館）